

# あすへの約束

超高齢社会とケア

八十代の母親は寝たきりで要介護5。二人の息子たちには知的障害がある。NPO(特定非営利活動)法人・風まくら(岡山県奈義町)のケアマネジャー、岡部久美子さん(四二)が、その一家に出会ったのは五年前だった。

息子の一人は知人からたびたび金を無心されていた。それぞれの年金だけで賄われていた家計は破たん状態。母親の介護保険サービスに充てる月三万五千円余の自己負担の支払いも厳しかった。

母親のケアプランを立てるといふケアマネ

## ⑦ 枠の外

## 第1部 支えの場で

# NPO 自由に動きたい

十五件程度が適当といわれる。だが、岡部さんらスタッフは二十件程度しか担当しない。利用者向き合う時間を大切にしたいと考えるからだ。

制度の枠の外にある声に耳を傾けることで、少しの安心でも提供したいという思いがスタッフにはある。

一家のために、岡部さんは地元の社会福祉協議会を訪ねた。四年前のことだ。

日常生活自立支援(権利擁護)事業。判断力の衰えた高齢者や障害者の財産を守るために、通帳や印鑑

を預かり、出入金を代行する仕組みだ。岡部さん(左)と岡部さん(右)は社協に手続きを行って、契約の説明の



「風まくら」の池原さん(左)と岡部さん。利用者の細かなニーズに対応するため、有償ボランティアや福祉運送も手掛ける

ために一家への訪問を始めた。

母親は拒み続けた。自分がいつも横になっている寝床。その下に通帳や現金―一家の財産はあった。動けなくなっても家を守るのは自分だという自負と責任が母親をかたくなにしていた。

福祉、司法の専門家との連携で家族一人ずつの支出入を整理、借金返済の道筋がつき、契約が終わったのは昨年。支援開始から三年の歳月が流れていた。

だが、戸外の空気に触れた途端、表情に生気が戻る高齢者の姿を見るたび、仕事の限界へのもどかしさが募ったという。

岡部さんが担当する一家の母親は今、言葉も表情も乏しくなっていた。本音もなかなか読み取れない。

それでも、わずかながら家に蓄えができたことを伝えると、岡部さん(右)は、買物をお願いした。大好きなあんぱんだった。

さん(四三)は前職の訪問看護師時代、利用者のお年寄りや買い物や墓参りに行き、周囲から「業務の枠を外れている」と注意されたことがある。

だが、戸外の空気に触れた途端、表情に生気が戻る高齢者の姿を見るたび、仕事の限界へのもどかしさが募ったという。

岡部さんが担当する一家の母親は今、言葉も表情も乏しくなっていた。本音もなかなか読み取れない。

それでも、わずかながら家に蓄えができたことを伝えると、岡部さん(右)は、買物をお願いした。大好きなあんぱんだった。

ちょっとびりうれしかった、と岡部さんは言う。

NPOの創設メンバーでケアマネの池原忍